

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、企画展「古代から中世へ」が開催されています。今回は、この企画展で展示されている市内北西部の田宮地内で発見された中世の埋納銭を紹介いたします。

左の資料は、昭和53(1978)年に、現在の田宮字榎平から出土しました。当時、この地は畑で、「辻屋敷跡」と呼ばれていました。発見された多量の銭は、新治中学校郷土研究クラブ(当時)が一部調査を行い、後に茨城県立歴史館の内山俊身さんが現地の聞き取り調査を加えて報告を行いました。



田宮出土銭

田宮の出土銭と中世の方形館

内山さんの研究によると、発見時の聞き取り調査で銭の容器などは発見されていないことから、壺ではなく布などの腐食しやすい材質を使って埋納したこと、また、竪穴状の穴からまとまって出土したことから、祭祀などにもない埋められたと推定しています。

出土銭の種類ごとに細かく分類した結果、最も古い銭は中国後漢時代の五銖銭で、最も新しい銭は中国北宋の咸淳元宝(1265年鑄造)であることが分かりました。整理した銭の総数は5183枚で、発見以後に失われた分を加算して約7300枚が埋められていたと推定しています。

田宮出土銭のように、多量の銭が地中に埋められる例は全国的に多数報告されています。各地の研究者の成果によって、これら中世の埋納銭は最新の埋納銭の種類や銭の組み合わせによって、どの時代に埋められたか推定できるようになってきました。最新銭が咸淳元宝の場合、13世紀第4四半期から14世紀第1四半期ごろ、つまり鎌倉時代の後半から末期ごろの埋納の可能性が高いと考えられます。

田宮出土銭の埋納にどのような人々が関与していたのかは、よく分かっていません。時代が下ると、南隣の高岡に臨濟宗寺院の法雲寺が領主小田氏の援助により建立されます。法雲寺の史料によれば、室町時代の半ばごろに、高岡や田宮から年貢が銭で法雲寺に納められた記述があり、かなり一般にも銭が普及していたことがうかがえます。それよりも古い可能性があるこの出土銭を理解するために役立つ発見が、田宮地内の発掘調査にあります。

昭和62(1987)年度、国道125号バイパス建設工事にもない、田宮古墳群の発掘調査を実施しました。このとき、幅約3メートル、深さ80センチメートル以上の断面逆台形の直線の堀が、20メートル以上の長さで発見されました。溝は中央部を掘り残して土橋とし、この土橋周囲から14世紀ごろの丸底のかわらけがまとまって出土しました。

土橋の周囲から丸底のかわらけが多量に出土した点は、つくば市の島名前野東遺跡で発見された鎌倉時代後半の方形に堀を巡らせた館跡と非常によく似ており、田宮古墳群で発



田宮古墳群の堀から出土した丸底かわらけ

見されたこの溝は、中世の武士が営んだ方形館の堀の一部と考えられます。田宮の出土銭とこの方形館は時期が重なるため、相互に関連をもつ可能性があります。

同じような中世の方形館は、水戸市田谷町の白石遺跡でも発見され、白石遺跡の近くからも、最新銭として田宮と同じ咸淳元宝の6144枚の埋納銭が報告されています。これらのことから鎌倉時代後半には、武士の地域支配の拠点となる方形館と銭の流通が常陸国(茨城県)でも盛んになっていったことがうかがえます。

企画展「古代から中世へ」は、12月6日(日)まで開催中です。ぜひご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(0826・7111)